

ー・プロダクションは、稽古期間からオーケストラにも合唱にも評判が良く、実際満足度の高い公演だった。最近、行く先々で見かけるバリー・コスキーの演出は、視覚的に愛でるような美しさにあふれている。それもそのはず、彼の祖父はロシア人でチャイコフスキー・ファンだった。祖父の遺品のレコードを聴きながら、コスキー自身もファンになったのだという。《エフゲニー・オネーギン》の演出は初めてということで、そんな彼の理想が凝縮されたのだろう。その情熱を全身で受け止めて体现したソリストたちも素晴らしかった。

以前、ミラノ・スカラ座のモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》で、新しいドン・ジョヴァンニ像を提示して強い印象を残したペーテル・マッティは、その期待を裏切らないリアルで多面性のあるオネーギンを演じながら、豊かな倍音を含む柔かな声は、常に自然に心地よく響いていた。サニーボーイな恋人を演じさせれば天下一品のバヴォル・プレスリクは、だからこそ決闘前の暗さとの対比が顕著で、続くアリアでは観客を泣かせた。安定した歌唱と抑えた演技で演出家の意図を十分に表現したタチアーナ役のオルガ・ベツメルトナと、オルガ役のクセニア・ドッドニコヴァは当劇場に初登場だが、これからの活躍が楽しみだ。スラヴ系特有のふくよかな声を聴かせたフィリビエヴナのマルガリータ・ネクラソヴァと共に、純ロシアな3人娘であった。

惜しむらくはスタニスラフ・コチャノフスキーの指揮だ。オーケストラを率いる力が弱く、それでも無理にアッチェレランドを試み、非生理的な音楽になっていた。温かい音色で和音を繋いでいく部分は優れているが、先を見ることができないのか、タチアーナの手紙のアリアなど、音楽が止まる寸前のようなゆっくりのテンポで、それでもあの長大なアリアをクライマックスまで執念で膨らませたベツ



オネーギンを歌ったマッティ(左)とタチアーナを歌ったベツメルトナ(右)。コスキー初の《エフゲニー・オネーギン》だった ©Monika Rittershaus

Opera チューリヒ歌劇場の新シーズンオープニング《エフゲニー・オネーギン》  
今シーズンのオープニングを飾るニユ

# Scramble Shot

メルトナに同情した。ヴェテランの指揮者でこのキャストを聴いてみたいものだ(10月13日所見)。 (中 東生)

